

二つの曝井(さらしい)を訪ねて

① 常陸国那賀郡の曝井/水戸市愛宕町滝坂 所在

この木々の段丘に曝井がある/右手の坂を登る



この坂を少し登ったところ



この左手に曝井があるという



説明板や石碑が立っている



この坂は「瀧坂」と呼ばれるようだ



坂を登ったところから見たところ



公園のように整備されている





那智郡那智町
那智の滝
第一滝
喜多

那智の滝
第一滝
喜多

三粟みつきりの那賀ながに向へる曝井はくせいの絶えず通はむ
 そこに妻もか

この歌は万葉集巻九にあつて、普通、高橋
 虫麻呂の作といわれている。この曝井は「常
 陸国風土記」の那賀郡の条に、「坂の中に泉
 がわき出て、水量が多く清らかで、夏に村の
 女たちが布を洗つて曝らした。と書いてある。
 この辺、この台地からは各所に湧き水が見ら
 れるが、ここで布を曝らしたの場所は、調として都
 へ納めるためであつた。多う。それは、女性の仕
 事であつた。夏の日、多くの女性が湧き水に
 ひたつて、布を曝らす。その水にたむれるが
 如き。若やいだ姿態に、虫麻呂は口マンを感
 じて、この歌が出来たのである。う。

昭和五十二年八月

常陸万葉の会

水戸西フイオンスクニフ寄贈

「萬葉曝井の森」とある



さて、正面の石碑の左手から水が湧き出している



こんな感じ



「曝井」と記されている



曝井

萬葉集

三粟の中にむきたるさらし井の
たえすかよはんそこにつまもが

(卷九一七四五)

この碑は、明治十一年(一八七八)当時の地主
桜井安麿が「曝井は常陸國の名所にして萬葉集に
詠歌あり、又風土記に記して詳なり。然るに千余
年の久しきを歴て、今はその處をしるものまれなり。
東湖藤田先生嘗て余に誦へらく、子はその土地の
地の主なれば、石文を建て世人をして其處を永く
忘れざらしめんことこそ本意ならめと」。先生の
言葉のままに石文を建てたものである。

水戸市

この湧水は池を形成している



左手は先程の「瀧坂」の標柱



さて、右手前方にも石碑などが立つ





近くには常陸国府から豊北方面に至る官道があり、駅家(台渡里官衙遺跡群付近)があった



すぐ近くに愛宕山古墳がある



この階段を登ってみる



上は広い公園となっている



そこから曝井を見下ろしたところ





参考ホームページ

<http://www.mitokoumon.com/kankou/%E6%9B%9D%E4%BA%95.html>

<http://achikochitazusaete.web.fc2.com/manyoukochi/ibaraki/sarasii.html>

http://outdoor.geocities.jp/kojyo_annai/20090319_yusui/13_ibarakiken/sarasi_i.html

<http://www5a.biglobe.ne.jp/hpkoto/ara/manyou/ibarakimitomanyosarashiinomori.html>

② 武蔵国那珂郡の曝井/埼玉県児玉郡美里町大字広木字曝井 所在

正面に曝井がある



この橋を渡る



左手の標柱には「史蹟 曝井」とある



傍には幾つもの石碑が立つ/上の写真の黒い石碑はこれを新しくしたものらしい



こちらにもある



旧跡 さらし井

〔埼玉県指定 昭和三十六年九月二日〕

さらし井は、大字広木の粉木川の端に岩石で囲まれた井戸である。往古、織布を洗いさらすために使用した湧水で、ここでさらされた布は、多く調布布として朝廷に献納されたと伝えられる。

万葉集巻九に恋歌「三栗の中にめぐれる曝井の絶えず通わんそこに妻もが」とある。

美里町教育委員会

ここは、いかなる早魃かんばつにもかれることなく、千数百年の昔から湧水がさらさらと流れ、当時の婦人達の共同作業場でもあり、又、恋歌にもあるように悩みを訴え愛を語る社交の場でもあったことがうかがえます。

ここより、西二〇〇m先に妻である真足女またりめが夫を思慕し詠んだ万葉歌碑があります。当時を思い浮かべながら観光ルートの一つとしてごゆつくりと散策を楽しんで下さい。

美里町観光協会

奈良時代、織布を洗い曝すために使用された井戸という



これが、「曝井」の跡



ところで、ここは説明板にあった「伝大伴部真足女の遺跡」/「曝井」のすぐ西側にある





万葉遺跡

伝大伴部真足女の遺跡

県指定旧跡(昭和三六年九月一日)

ここ一帯は大字広木字御所ノ内と呼ばれています。

堀形の田畑に囲まれた九十メートル四方の遺跡が、防人檜前舍人石前(さきもりひのくまのとねりいわさき)の館跡といわれています。

真足女またりめは、檜前舍人石前の妻で、防人に赴くことになった夫に、この悲しい別れに臨んで、惜別の情を詠じたのが、防人の歌として、万葉集巻二〇に載せられています。

「枕太刀腰まくらたがわしに取り佩はきまかなしき背せろがまき来こむ月つきのしらなく」

この歌は夫を思慕する妻の真情を、遺憾なく吐露とよしたもので、一・二〇〇余年後の今日でも、なお切々として、人の心を打ってやまないものです。

美里町教育委員会



参考ホームページ

<http://www.asahi-net.or.jp/~ab9t-ymh/kakuchi/kodama01/sarasii.html>

http://www.asahi-net.or.jp/~fx3j-aid/kofun/saitama/56_msto/meisho.html

<http://www5a.biglobe.ne.jp/hpkoto/ara/manyou/saitamamisatosarashii.html>

<http://blog.goo.ne.jp/nara05m037/e/877a13023904c55fc169887f03d4c02b>

<http://homepage2.nifty.com/kssm/manyou/misato/misato.html>